地上のどんな種よりも小さいが

奨励	近藤　十郎〔こんどう・じゅうろう〕
奨励者紹介	同志社女子大学名誉教授 日本キリスト教団牧師

更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

（マルコによる福音書　４章30―32節）

「神の国」の論理構造

「神の国」の論理構造について、マルコによる福音書の著者は、それを一粒のからし種にたとえて、次のように言い表しました。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」と。

同志社での学びと出会い

同志社１４０年の恩寵の歴史を、どのような視点から俯瞰するか、今日、この日の創立記念礼拝で私に問われていることは何か、と考えるにつけその責任の重さに身が引き締まる思いです。私が同志社という学園に直接かかわった年数は、学生時代も含めてわずか40年ほどの短い期間に過ぎません。しかし、同志社に学び働く中で得られた宝の数々は、枚挙にいとまがありません。友との出会い、教師たちとの出会い、同志社ならではの中身のぎっしりと詰まった数々の出会いを改めて振り返って、自分の今ある姿を確かめているこの頃です。こうした出会いの基になったものは何か。それを私なりに証しするために、マルコによる福音書に記されているイエスの「神の国」のたとえは、私にとって示唆してくれる部分が多くあります。地上における最小の種が、人間の思いをはるかに超えて想定外の大いなる結実をもたらす、というのですから、「神の国」のシステム、その体系やシステムの持つ本質を示すのに、これほど明快なたとえはない、とも言えるでしょう。微小なる種が地に蒔かれて、成長するとどんな野菜よりも大きくなり、葉を繁らせてそこに空の鳥が巣を作るほどになる、というのです。

からし種のこと

このイエスのたとえ話に出てくる「からし種」が、実際はどのようなものであったのかについては諸説あるようですが、学問的にそれを同定する作業は、あまり意味がないと思われますので、その詳細を紹介するのは控えて、とにかく当時の人々が、種のうち最も小さいものと認識していた種ということにしておきましょう。ついでですが、先年イスラエルの地を訪問した時、ある古い修道院の入り口に、「これがからし種の木だ」とガイドが説明してくれた木がありました。それは見たところ草や野菜ではなく、明らかに木でした。その枝に付いていた実（鞘）をいくつか取ってきていた（植物検疫違反になるかもしれませんね）のを思い出しました。種は鞘から弾けてこぼれていました。よく見るとそのこぼれた種は、種というよりは粉と言った方がいいほど、小さなものでした。インターネットで確かめたら、米粒は５㎜、ゴマは３㎜、からし種は０・５㎜の大きさだと記されていて、その写真も添えられていました。微小なる種が地に蒔かれて成長する。繁った葉の陰に空の鳥が巣を作る。その鳥が小鳥だったのか、カラスやトビのような大きな鳥だったのか、想像を逞しくすれば結構楽しいかもしれません。いずれにせよ、「神の国」（「天の国」）の論理構造は、価値の転換、逆転の発想、従来の固定化したものの考え方の転換、といった要素を強くもっている、ということではないでしょうか。マタイやルカの福音書では、マルコの語るたとえ話に加えて、さらに「パン種」のたとえ話も並行して記述しています。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる」（マタイによる福音書13章33節、ルカによる福音書13章20―21節）というわけです。パン種、酵母はパンを膨らませるのに、ごくわずかの量で足りる。この微量の酵母によって、じつに三サトン（約38・４リットル）もの粉を膨らませることができる、というのです。

同志社の始まりは祈りから

同志社にかかわる者であればだれでも周知のことですが、今から１４０年前の１８７５年11月29日、同志社の始まりは、新島の私宅での祈祷会に集ったわずか８名の生徒たちの祈りの集団にありました。その朝の新島の祈りは、「涙にみちた〔祈りの〕言葉」であったと、デイヴィスが書き残しています（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』10　同朋舎出版　１９８５年　２１８頁。以下⑩２１８）。この祈りの集いのもつ意味が、その後の同志社の１４０年におよぶ歴史を通して現在に至るまで果たしてどれほど確実に継承されているか、が問われています。１世紀半に及ぶ歴史のなかで、同志社は、宗教界は言うまでもなく、教育や福祉、医療看護、政治の世界に至るまで、数多くの人材を輩出し、目をみはるような偉大なる貢献を成し遂げてきました。同志社を母校とする者のひとりとして、誇らしく思うと同時に同志社人であるがゆえに期待されることも多くあることを思わされていささかの緊張を覚えます。生徒わずか８名から始まった同志社は、今や日本における「私学の雄」のひとつとまでに言われるほど、その規模において物量的には飛躍的な成長を遂げましたが、果たして新島の祈りが真摯に継承され、今もなお教育のなかに確実に根付いているか、反省と再確認の必要がありますね。

同志社の基本理念

新島は同志社設立の基本理念について、次のように言っています。すなわち、「その目的とするところは、ただ単に英語や他の諸学科を教えるだけでなく、高度の道徳的、精神的な諸原理を授け、このようにして、知識と学問を備えた人々だけでなく、良心と真摯さを備えた人々を鍛えること」である、と（⑩３３５）。先ほど竹田先生に朗読していただいた「同志社大学設立の旨意」の現代語版です。高度な学問や知識を身に着けて世に名をなすことだけでなく、新島流のキリスト教信仰によって裏打ちされた、「良心と真摯さ」を兼ね備えた人物の養成、ということ、「良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」という祈りこそ、良心教育を標榜する同志社の教育の基本理念であったことを、今また再確認することが私たち同志社人に迫られています。

私と同志社

あえて今、私の個人的な昔話をさせて頂ければ、私の同志社との出会いは、新潟大学の学生の頃、前年まで同志社総長を務めておられた大塚節治先生が、私の所属する新潟教会に特別伝道集会に講師としておいでになり、お話しくださったことに始まりました。ちょうどその頃、大塚先生は『神の算盤』というタイトルの１冊の新書版（大塚節治先生謝恩記念事業委員会編　新教出版社　１９６５年）を出版しておられました。新潟教会での説教題が「神の算盤」であったかどうか、今は定かではないのですが、その内容は神様には神様独自の算盤を持っておられて、そこではじき出される計算は、私たちの想定する数字や間尺によっては表しえないものだ、というようなことを話されたと思います。３回生の頃、同じように新潟教会でのある日の礼拝に、私を受洗に導いてくれた高橋勝牧師の、同志社時代の同級生であられた竹中正夫教授が来られた際、私が献身の志を抱いて同志社大学神学部への入学を希望していることを先生に伝えました。ただし、その当時の私は親からの経済的支援はゼロで、奨学金とアルバイトでかろうじて学生生活を続けていましたので、京都の私学に学ぶための経済的保証はないことを正直に申しあげました。竹中先生は、「近藤君、そんなことは心配ない、とにかく同志社に来てみなさい。後は何とかなるから」というお言葉でした。明らかに何ともならない状況で、「何とかなる」と、あっさり言いのけられる先生の言葉に、あっけにとられたことを今でも思い出します。そして、不思議なことに実際「何とかなった」のです。当時は同志社大学神学部も他の学部、他大学同様、60年安保から此春寮闘争、万博問題や靖国問題など、70年安保に向かって激しい学園紛争の最中にありました。同志社大学の神学生たちの多くが学園を去ってしまったこともあってか、例年になく多くの編入生が入学を認められたようです。その当時は珍しかった社会人入学や、３年次編入、学士入学によって神学生となった者もたくさんいました。私は学士入学生のひとりとして、学部の単位を取りながら、大学院の科目も取る、という形で３年間学生生活を続けることができました。学費は海外教会からの奨学金で一切を賄うことができ、仕送りのない学生には生活費まで支給され、アルバイトもする必要がありませんでした。「何とかなるからいらっしゃい」と誘ってくださった竹中教授は、研究室の書籍や各種書類の整理、翻訳のお手伝い等の仕事を私にくださって、「私のこの研究室にある書物をどれでも好きなように利用してくれて結構」と言われ、何がしかの値のポケット・マネーを提供してくださいました。貧乏学生の私にとっては、まことに涙の出るような先生との交わりでした。

壮図寮での出来事

私は神学生のための寄宿舎であった「壮図寮」への入寮を許され、およそ30名の学部生、大学院生と生活を共にしました。壮図寮では、１ヶ月１回だったか（週１回だったか記憶は不明瞭）、土曜日の夕食に神学部の先生方をお招きすることになっていて、楽しい食事会が催されました。山崎亨教授は旧約学の先生で、教室ではじつに厳しい方でした。色白の先生は怒ると顔が真っ赤になります。学生たちはこの教授を「鬼の山崎」と言って、恐れていました。ある日の授業で１人の学生が聖書を持参することを忘れて教室に来ていて、それが分かった時、先生は例のごとく、顔を真っ赤にして、「将来牧会に出ていこうとする者が、教室に聖書を忘れてくるとはどういうことか」と怒られました。生意気盛りの若者たちも、先生のお叱りに頭をあげることはできず、教室全体がシーンと静まり返りました。驚くべきことに、この「鬼の山崎」が私たち若者たちと寮の共同浴室に一緒に入られたのです。裸になれば先生も学生も一緒です。

「先生、背中を流しましょうか」と私が言うと、「いやー、ありがとう。心もからだも洗われるよ」と先生はおっしゃって、子どものようにうれしそうなお顔でした。新潟大学で英文学を学んでいた頃には、ゼミの先生方と飲み会をすることはあっても、教師と学生という立場を超えて、人として互いに心の肌に触れ合うような体験はなかったと思います。同志社に学んで初めて実感したのは、このような単なる子弟の関係を超えた人格的な触れ合いを経験することができた、ということです。組織神学の土居真俊教授は、学園紛争でキャンパスがバリケード封鎖されている中、キャンパスでは授業ができないので、「研究を続けたい人は私の自宅にいらっしゃい」と言われて、博士課程に学ぶ数人の仲間たちと当時の教義学の基本的な文献を開いて学ぶ読書会を開いてくださいました。

このような経験を語ろうとすれば、その例は枚挙にいとまがありません。「これが同志社か」と、その当時、何度も思わされたことです。これらの貴重な青春の記録は、私の今を創った原点でもあったと改めて感謝しています。学びの中で与えられたかけがえのない友人や先生方との出会いを通して、私は自分の居場所を発見し、自分が大切にされている、ということを実感しました。当時の同志社には学園紛争時の混乱の中にあっても、確かにそのような迫力、霊的な力強さが充満していたのです。今は昔、の話でしょうか。

からし種は、地上のどんな種よりも小さいものです。しかし、その種はそれ自体のうちに無限の可能性を秘めています。そのような可能性を引き出す教育の場を若者たちに提供しようとして、新島はあの日、１８７５年11月29日の祈祷会において涙の祈りを捧げたのではないでしょうか。限られた学びの年月とその後の教員としての同志社での働きの中で、私は私なりに、同志社のスピリットに触れることができたのではないかと改めて感謝しています。

２０１６年11月16日　京田辺水曜チャペル・アワー「創立記念礼拝奨励」記録